

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 五十嵐美代枝姉

開 会 招 詞 詩篇96：1-4

* 賛 美 歌 25：1

1. あまつみつかいよ、イエスの御名のちからをあおぎて 主とあがめよ。

ちからをあおぎて 主とあがめよ。アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

かみ 神よ、わたしを^{あわ}憐れんでください。おんいつく 御慈しみをもって。ふか おんあわ 深い御憐れみをもって、そむ つみ 背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの^{とが}咎をことごとく^{あらい}洗い、^{つみ}罪から清めてください。わたしは^{とが}咎のうちに^う産み落とされ、^{はは}母がわたしを^み身ごもったときも、わたしは^{つみ}罪のうちにあったのです。わたしを^{あら}洗ってください。ゆきより^おも白くなるように。神よ、わたしの^{うち}内に^{きよ}清い心を^{そぞう}創造し、^{あた}新しく^{たし}確かな^{れい}霊をさずけてください。すく^{よるこ}救いの喜びを再びわたしに^{あじ}味わわせ、^{じゆう}自由の^{れい}霊によって^{ささ}支えてください。主よ、わたしの^{くちびる}唇を開いてください。この^{ひら}口は、あなたの^{さんび}賛美を歌います。主イエス・キリストの^み御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、^{なにも}何者をも^{かみ}神としてはならない。
- あなたは^{じぶん}自分のために^{きざ}刻んだ^{ぞう}像を^{つく}造ってはならない。それに^ふひれ伏してはならない。それに^{つか}仕えてはならない。
- あなたは、あなたの^{かみ}神、^{しゆ}主の名を、^{とな}みだりに^{しゆ}唱えてはならない。主は、^なみ名を^{とな}みだりに^{もの}唱える^{ばつ}者を、^{せい}罰しないではおかない。
- ^{あんそくにち}安息日をおぼえて、これを^{せい}聖とせよ。
- あなたの^{ちち}父と^{はは}母を^{うやま}敬え。
- あなたは^{ころ}殺してはならない。
- あなたは^{かんいん}姦淫してはならない。
- あなたは^{ぬす}盗んではならない。
- あなたは^{りんじん}隣人について^{ぎしょう}偽証してはならない。
- あなたは^{りんじん}隣人の^{いえ}家を^{むさぼ}むさぼってはならない。^{りんじん}隣人の^{つま}妻、^{りんじん}またすべて^{りんじん}隣人の^{もの}ものを^{むさぼ}むさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 38：1, 2

1. 勲なき我を 血をもて贖い、イエス招き給う、み許に我ゆく。

2. 罪科の汚れ 洗うに由なし、イエス潔め給う、み許に我ゆく。アーメン

公 同 の 祈 禱 5 使 徒 信 条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、そのひとりご、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリ
アより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみをうけ、十字架につけられ、死にて葬られ、よみ
に降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。か
しこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。
われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこし
えの命を信ず。 アーメン。

献 金 (黒) 教会活動・(赤) ふじみ野市社会福祉協議会 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 詩篇22：23-32(旧約 p.853)

コロサイの信徒への手紙1章24-29節(新約 p.369)

説教・祈祷 「苦楽を共にしよう」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 84：1, 2

1. ころろひとつにいのろう。ころろひとつにうたおう。
たがいのいのちかがやかせ、ともにいきるこのひのために。
2. われらのいたみのろう。ゆるしといやしもとめて。
たがいのいのちいだきあい、ともにいきるこのひのために。

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 64

みめぐみあふるる 父、み子、みたまのひとりのみ神に みさかえつきざれ。 アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週：古澤純一長老)

本日 受付 1階：若月学・森永美保執事 2階：加藤良明執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週 受付 1階：大日南信也・藤井牧子執事 2階：大日南隆夫執事 / ZOOMホスト・録音：番場駿也

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ1：24-29「苦楽を共にしよう」

プロポーズの言葉？

今日の説教題は「苦楽を共にしよう」としました。この個所を最初に読んだときになんとなく思い浮かんだ言葉です。ちょっと古い表現かもしれませんが。わたしもそうですけれど、昭和生まれの方ならピンとくるかもしれません。「一緒に苦勞してくれないか」というのはその昔プロポーズの言葉だったのですね。一緒に暮らして、一緒に苦勞して、でもその生活に幸せを見つけていこう、こんな呼びかけです。ちょっと演歌っぽいのですが。もちろん、この手紙を書いているのはパウロですから、これは教会の話です。教会にも苦勞があります。様々にあります。けれども、そこで一緒に生きてくととてもうれしいことがある、そんな呼びかけの言葉として、今日の聖書を読んでいきたいのです。

一節で二度びっくり

とはいえ、この書き出しの24節は、不思議な言葉が続きます。一節で二度びっくり、とでもいうような言葉です。そもそも、「苦しみを喜びとし」というところで「えっ」と思います。苦しみを喜ぶ、なんてちょっと変です。さらに、「キリストの苦しみの欠けたところ」というところでもう一度「えっ」となります。イエス様の十字架の苦しみは不十分なのか、それは異端では？とってしまいます。もちろん、そのようなことはありません。何しろ、このコロサイ書では先週読んだ通りですが、20節、22節で、「十字架の血によって平和を打ち立て」、あるいは「御子の肉の体において、その死によってあなた方と和解し」とはっきりと書いています。イエス様の苦しみが、罪の贖い、すなわち、私たちのあらゆる欠けを補って、神様の前に立てるようにしてくださっている、という意味で、不完全などということとは全くあり得ません。それでもなお、やはり、この二つのこと、「苦しみを喜びとし」と「苦しみの欠けたところを身をもって満たす」という言葉は、なぞの言葉です。ただし、この二つはおそらくつながっています。ですから、今日は、この二つの言葉の意味と、そのつながり具合を一緒に考えていきます。そこでまず、「あなたがたのために苦しむ」という言葉についてです。

あなたがたのために苦しむ

今日の所の少し後、2章の始めにこんな言葉があります。わたしが、あなた方とラオディキアにいる人々のために、（少し飛ばして）どれほど苦勞して闘っているか、分かってほしい。とあります。同じような言葉は、4章にもありましてそこではパウロの同労者エパフラスが「あなたがたのために...非常に苦勞している」（4：13）と書いてあります。そうしますと、この所でパウロが「苦しむ」と言っているのは、一般的な意味ではなく、むしろ、教会に仕えるその奉仕のゆえに、苦勞している、という意味だと分かります。パウロには多くの同労者がいて、いわばチームパウロとして、福音を伝えることを行っていました。そして、そのような彼らの活動には、様々な困難もあった、ということは、パウロの手紙の多くの所で語られています。これも以前から何度もお話してきましたが、とりわけ、コリント書では、そのような苦難の歩みが語られている箇所があります。例えばこれはもうそのまま読んでしまいましたが、コリントIIにこんな言葉があります。「6:4 あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、苦勞、不眠、飢餓においても、」とまだ続きますが、その中でも忍耐強く正義と愛をもって仕えている、というように語っているところです。たしかに、宣教にはそのような苦勞があったのは確かでしょう。

なぜ喜ぶ？

しかし、コロサイに話を戻しますと、このコロサイの場合の苦勞は、もちろん、悪魔的なもの、あるいは異端といったものとの戦いもあったでしょうけれども、それだけではないのではないかと私には思えるのです。そして、その苦勞には喜びが伴っているのです。苦難と共に喜びがあるのです。そして、おそらくその苦難と喜びの現場、それは、抽象的なものではなく、むしろ、実際的な教会にあるはずで、なぜなら、25節はこう続いているからです。「神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。」ここで重要なのは、み言葉を余すところなく伝える、という言葉、そして、「教会に仕える」と

いう言葉です。み言葉と教会なのです。パウロが苦勞する場とはほかでもない、この教会の現場なのです。そして、わたしたちが今こうして体験しているこの礼拝こそが、その苦勞と喜びの現場なのです。そこで大切なのは、この苦勞とは、一人パウロのものではなく、また、パウロと同じ立場の奉仕者だけのものでもない、という事実です。なぜなら、パウロは、「教会に仕える」と言いますが、これは全く当たり前のこととして、奉仕ということは、相手がないと始まらないのです。一人で、勝手に仕えた、仕えた、と言っているても何の意味もありません。

み言葉を宣べ伝える一礼拝が形作られる

もっとはつきりと言え、この礼拝は、どのようにして成り立っているのかです。これは以前にもお話ししたかもしれませんが、私が空気に向かって語っても、おそらく何の意味もありません。もちろん、牧師が一人きりで語るところにおいても、神様は聞いてくださっているはずですが、礼拝は、やはり、説教を語るものと聞くもので作り上げていくのです。そして、礼拝に集うこともまた、ある意味では、苦勞があるはずで、熱い寒いだけではありません。体が疲れてしまっていることがあります。心が疲れてしまっていることがあるかもしれません。引きずるような思いで、何とか教会にたどり着く、ということがあります。教会の椅子に座っていて、思わず睡魔に襲われることもあります。あるいは、信仰そのものの危機が襲うことすらあるかもしれません。私たちは悪魔について普段あまり真面目に考えませんが、私たちを妨げようとする力が働いているということは実際あります。そのような中で、しかし礼拝に集められるというのは、ある意味では奇跡的なことです。また、そのようなみ言葉を解き明かすための備えにもまた、様々な困難さがあると言え、あると言えるかもしれません。そして、そのような困難のある中で、共にみ言葉に聞いていくのです。わたしたちが礼拝を守る、ということは、すでにこのような困難を味わいつつ、困難と闘いつつ、その中で行われていくものです。毎週、毎週の礼拝が実は、困難と闘いながらつくり上げられるものです。

秘められた計画＝キリスト、内にいるキリスト

そのような礼拝において、何が起きるのかを語っているのが、続く26、27節です。ここは続けて読んでしまいます。「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」秘められた計画、すなわち、私たちにはわからないようにされていたものが、今や明らかになっているということです。それは、とても具体的なことです。膝を打つ、という言葉があります。何でもいいのですけれども、例えば、勉強や、習い事で、ある時急に、「ああ、そうか」、とわかってひざを打つ、なるほど納得だ、とうれしくなる、ということがあります。それで、その計画とは何かと言いますと、イエス様ご自身だ、ということです。先ほど、礼拝で、み言葉がそなえられ、語られ、聞かれる、そこに苦勞がある、ということをお話ししましたが、それが目指す先は、これです。「なんだ、私の中にイエス様がおられる」これがふと分かってしまう、そんな時があるということです。そのようにわかる時がもう来ているのです。

キリストに結ばれて完全に

そして、私たちの内におられるイエス様、キリストこそ「栄光の希望」だ、という言葉で27節は終わるのですが、実はそれで終わりではないのです。これで終わりなら、私たちは、そこでもう免許皆伝、それこそ教会から卒業してしまってもよい、ということになるのですが、実は、これはまだ始まりなのです。そもそも、希望という言葉自体、将来に向かって望んでいくことです。では何を期待するのかと言いますと、28節でこのような言葉があります。「すべての人がキリストに結ばれて完全な人になるように」。このところをあたらしい協会共同訳では「すべての人を、キリストにある完全な者として立たせる」としています。こちらもよい訳です。ちなみに、前回読みました、17節の「御子によって支えられています」も「御子によって成り立っています」あるいは「御子によって共に立っています」と訳せるとお話ししました。このイエス様によって、あるいは、イエス様と一緒に立っているんだ、ということのパウロは、「知恵を尽くして、教え、論じています」というのです。これからはずっとそうしてい

くというのです。完全な者となる、というのは、今この場で完成してしまうのではなく、むしろ、そのような完成に向かって、日々、整えられていく、もっと具体的には、毎週説教と一緒に聞いて、その中でキリストが形作られていくこと、そのものを指しているのです。

労苦とはキリストに形作られること

一緒にイエス様の形に近付いていく、このために私は労苦している、と29節でパウロは言います。伝道者、説教者と、教会に集うものが一緒になって、礼拝してイエス様の形を地上に表していくのです、それは確かに労苦です。毎週の労苦です。しかし、それは、喜ばしい労苦です。だからこそ、パウロは、さいしょに「苦しむことを喜ぶ」といったのです。また、そのようにして、イエス様の形がますます明らかになっていくことにおける労苦こそが、「欠けたことを身をもって満たす」、という言葉の意味です。なにしろ、欠けだけであるようなわたしたちが、この身をもって、イエス様の姿を現していくようになるのですから。そのために、あらゆる困難を乗り越えて、礼拝と一緒に作るのです。

苦楽を共にしよう

私たちは、このような意味で、イエス様によって、また、パウロによって、苦楽を共にすることへと招かれています。それは、喜ばしい労苦です。前向きな、機嫌のいい闘いです。もちろん、本当につらい時もありえます。しかし、それでもなお、その先に希望があり、喜びがある、そんな労苦です。

祈り

全能の父なる神様。あなたは私たちに主イエスという大いなる神秘を現わして下さい、その主イエスにおいて、私たちが新しいものとしてみ前に立たせて下さり、また、このキリストの豊かさへと、成長していくように招いていてくださいますから感謝します。キリストにある栄光の希望に励まされて、この週もまた、あなたにあって生きられますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。